

対等な立場で話し合うことができる子どもたちをめざして ジェンダー平等教育部会 授業研究会

感染症流行下で実施が難しかった中、3年ぶりにたつの市立香島小学校を会場に、研究所員の寺田奈央さんによる6年生の授業研究会をおこないました。ジェンダー平等教育部会をはじめ、分会や揖龍教組から、20人の参加がありました。

子どもたちはこれまでに、絵本『タンタンゴはパパふたり』、『わたしはあかねこ』を題材に、「好きになる性(性指向)」は人それぞれであり、「こころの性(性自認)」は自分で決められることや自分の個性も相手の個性も大切であること、また、『王さまと王さま』を題材に、偏見や決めつけによって生き方を強要される苦しさに気づき、なりたい自分になって生きることが幸せにつながることを学びました。そして、本時では、人権学習として『きらめき(中学校)』の「お弁当」を資料とし、身の回りにある家事や労働に関する性別による不当性に気づき、対等な立場で話し合うことができるようになってほしいという願いを込めて授業にとりくまれました。



子どもたちは事前に資料を読み、気になった家族の様子について線を引いていました。「お弁当をつくるのは母親」という潜在的な意識をもち、手伝ってと自分だけに言われた咲希、テレビやスマートフォンを見て夕食をつくらない兄と父、プロジェクトを喜ぶ母の思いを知りながら「係長になんかならなければよかったな」と言う父、「みんな、ごめんね」と謝る母などに着目していました。子どもたちは、「今まで料理するのはお母さんだったから、当たり前と思込んでいる」、「そんなにおなかがすいているなら自分でつくればいい」、「お母さんはやってみたいことがあるのに、お父さんは自分の意志だけを尊重している」、「お母さんが謝るのはおかしい」と感じ、「家族は助け合って生活するものだけど、お母さんだけが大変」、「お母さんがどれだけ料理が上手でも、疲れている時もやり続けるのはおかしい」と、なぜ母親ばかりなのかと疑問を膨らませていました。「お父さんは思いやりで言ったのだろうか」、「お父さんが係長になったら、何て言うかな。お母さんだとだめなのかな」と友だちから出た意見から考えを深めたり、男女の立場を入れ替えて考えたりすることで、固定的な性別役割分業意識があり、母親の自己実現を妨げていることに気づきました。また、次の日の咲希の会話の続きに「仕事を成功させるためにも家族で協力しないといけない」など変化した様子を考え、兄への「私たち二人で晩ご飯をつくってみようか」の一言に「自分たちがやれば、お母さんも助かる」、「少しでも楽になるように力になりたい」と子どもたちの意識も変化してきているようでした。さらに、「家族全員が幸せになるにはどうしたらいいでしょうね」の問いに悩みながらも「みんなが自分のやりたいことしながら、大変なことも分担したら幸せになるんじゃないか」と考えていました。最後には、内閣府男女共同参画局「男女別に見た生活時間」(2020年)のグラフを提示し、日本が他国に比べて男性が家事をしている時間がとても少ないことから、対等な立場で話し合い、協力し合うことの大切さを共通理解しました。

事後研究会では、子どもたちのがんばりがたくさん述べられる中で、「助ける」、「楽にする」という言葉が出てきていたが当事者意識が感じられにくかったのではないかと、「対等」、「平等」という言葉が出なかったという意見がありました。「母が料理」、「娘だけが手伝う」といった性の不平等性をもっと押さえておけば「対等な立場で話し合う関係性」についてもより考えることができたのではないかと、「父の一言は思いやりからの発言である」という意見をもう少し出させてから考えてもよかったのではないかと、等の意見が出ました。また、「幸せの定義は人それぞれであり、幸せは自分が決める中で、『家族全員の幸せ』とはどのような形なのか」と考えさせられたという意見もありました。学びの深い研究会になりました。